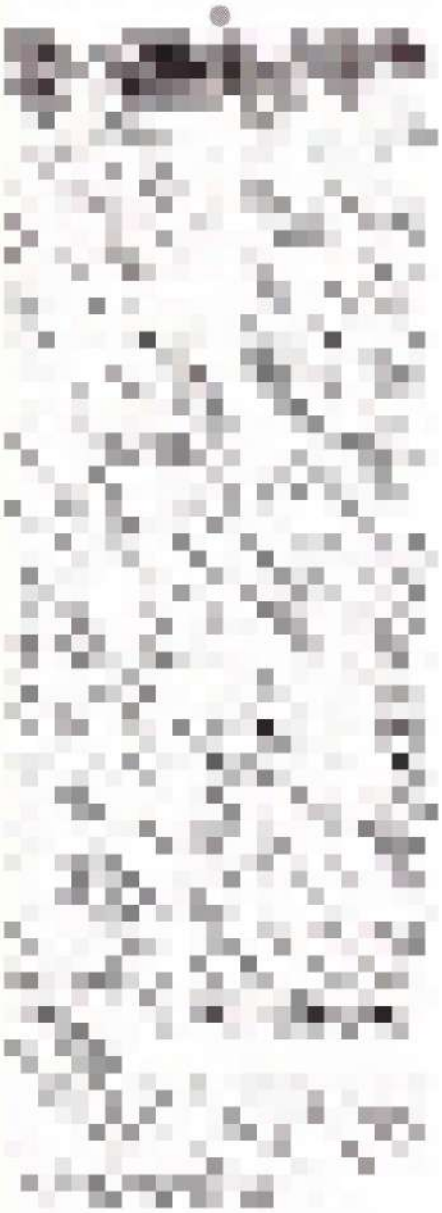
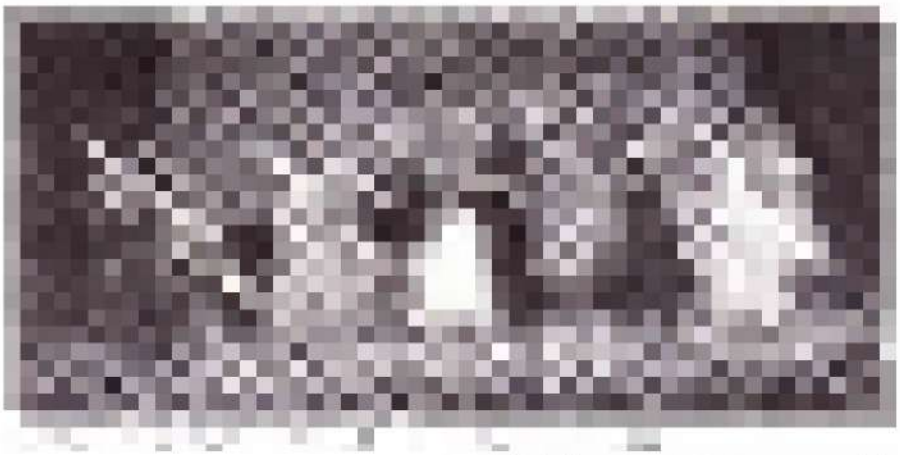
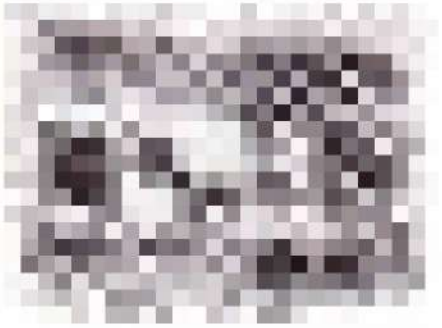


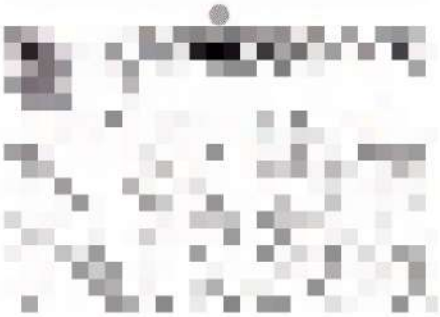


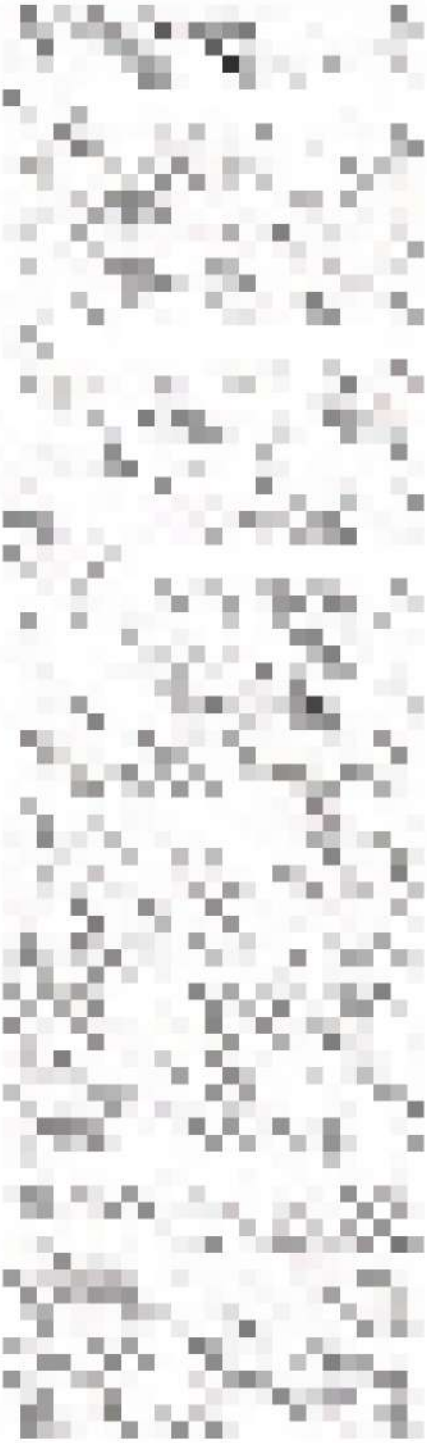
うだ。そこへ十二単衣におすべらかしの公家風花嫁衣装で蝶々さんが登場し、寝間着はバレリーナのチュチュ風という、アサガロフの滅茶苦茶な演出への憤怒と戦い続けた一夜だった。しかし、カーテンコールではブーイングもなく、周りは甘受していたのが空恐ろしかった。現代のスイス人にも、このような奇異な国として日本は映っているのだろうか。原作はさておき、プッチーニの意図は、異文化の奇怪さを表現することではなく、ヒロインに思い入れ、愛の悲劇を謳うことだったはずだ。だからこそ、散々だったスカラ座での初演の後、ピンカートンの辛辣なセリフなどをカットし、甘い3幕のアリアまで加筆したのではなかったか。

演出の不快感が音楽にも影響しているのか、重そうに歌うピンカートンのシコフ、誠実さが感じられない領事のデヴィドソン、数週間前に肋骨を捻挫し、湿布を巻きながら乗り越えたスンの題名役も、声は無理なく通るものの、中国人の大陸的気質と中国語からくる声の響かせ方のせいか、違和感が残る蝶々さんであった。リッツィ率いるオケもミスが多発したが、3幕の間奏曲は幻想的で聴き応えがあった。

翌朝まで消化不良のような不快感が続いた。やはり《蝶々夫人》には、1人でも日本人を組み入れてくれるよう、世界の歌劇場にお願いしたい。(中 東生)







Opera チューリヒ歌劇場《蝶々夫人》プレミエ公演より

真っ白な舞台に出て来たゴローは荒木経惟を模し、芸者達のポラロイドをなめ回す。料理人は総刺青。黒子の代わりに白塗りにふんどし姿の4人と荷物持ちの筋骨隆々な黒人までいると、ピンカートンとシャープレスは南欧のマフィアのよ